

# 長野県植物研究会10周年に寄せて

原

寛

H. Hara: A message for the tenth anniversary of the Botanical Society of Nagano

長野県は世界的に見ても植物の宝庫であり、長野県の植物の研究が日本の植物の研究にだけでなく、世界の植物学の進展に大きな貢献をしてきたといっても過言ではない。特に日本に近代的な植物学がとりいれられるようになった明治時代からは、長野県の植物は学界の注目をあび、私共の大先輩である諸先生方は長野県を訪れてはその度に幾多の新事実を見出され、また長野県在住のすぐれた研究者達が困難を冒してたゆまざる努力を重ねられた結果が数多くの著書・論文になって出版されている。

東京大学初代の植物学教授になった矢田部良吉先生は明治13年(1880)7月浅間山、御岳に採集旅行をされ、明治17年(1884)7月には戸隠山で日本特産属のトガクシシヨウマを初めて発見され、その資料はソビエトの著名な植物学者 Maximowicz のもとに送られている。三好学先生は明治19年(1886)碓氷峠・和田峠を経て駒ヶ岳に植物をさぐり、その記行文は「植物学雑誌」第1巻第1号(1887)のついでに、その時駒ヶ岳で採集されたハクセンナズナの図と記載は第3号に発表されている。その後植物学雑誌にはほとんど毎巻のように長野県の植物の記事がのせられている。殊に長野県在住の方々の活躍は目覚ましく、矢沢米三郎、河野齡蔵、田中貢一、八木貞助など誠に多士済々であった。彼等は更に力を結集して明治35年(1902)には「信濃博物学雑誌」が発刊され、大正の初めまで続いている。その各号には今読んでも興味深い記事が多く、また単行本としても田中貢一氏著の「信濃の花」(1903)など私が若かった頃感銘深く読んだ著書である。

そもそも長野県は日本の中心部に位置し、いわゆる北・中央・南の日本アルプスを初め黒姫山、浅間山、八ヶ岳、御岳の火山など成因を異にする高山が多く、その地形や気候はきわめて変化に富み複雑で、そこに見られる植物帯や個々の植物群の生育状態は誠に多岐多様である。地史的な変遷もはげしく、第3紀においてはフォッサマグナは長野県を縦断し、氷河期には高山に氷河がかかっていた。したがって長野県の複雑で豊富な植物相の起源や変遷などが解明されれば、それは日本全体の植物相の解明につながり、更に東亜全体の関連問題の解明の鍵になる。またおのおのの種類について見ても、第3紀以来の古い起源のものが遺存して

いると同時に、氷河期に侵入し又は分化したと思われるものもあって、長野県には日本の植物の起源、系統、分化などの問題を研究する絶好の資料がそろっている。

しかし近年長野県が誇るこの貴重なかけがえのない自然が、開発によって急速に失われつつあることは誠に残念である。最近ようやく自然保護が叫ばれるようになったのは喜ばしいが、その真の意義が十分理解されていない場合があまりにも多い。ある時は自然保護のためだといって路傍の草木を折ることさえ厳重に取締まり、研究に必要な資料の採集さえ仲々許可しないのに、他方では残り少ない貴重な自然の植物帯に自動車道やゴルフ場を設ける時、そこにある無数の生物を完全に死滅させ、その影響で周辺の生物を殺したり変えたりすることは無許可で行われているのに矛盾を感じない訳にはゆかない。どうしても開発が必要な場合には、まず十分な学術的調査に基いて、是非保護すべき自然と、止むをえず開発する場所・方法などについて長期の将来計画をしっかりと建てることが不可欠の条件である。更にもし開発される場所が決ったなら、それを前もって公表し、その場所に生育している全生物を一定期間自由に研究させ採集させるような措置をとることを提案したい。これだけでも色々な学問的成果が期待できる。自然は一度こわせば、決して復元することはできないのである。歴史を無視して発展はなく、貴重な自然を保護し残すことは私共が子孫へ対しての責務である。

また近年物理化学の進展により生物学にもその手法が広くとりいれられ、生命の起源の問題を初めとして実験室内での細胞レベルや更に分子生物学的諸分野が発展している。これに対して生物学独自の基礎的分野がややもすればおろそかにされ勝ちである。しかし現状では物理化学的な研究が進んだとはいえ、まだ単細胞の生物でも人為的に作ることはできず、まして高等な生物はこれをコントロールすることさえまだ遠い未来のことである。私共はまだまだ謙虚に自然に学ぶべきであり、自然を注意して観察して初めて知りうる未知の世界が生物学にはまだきわめて多く残されている。森林に足を一歩ふみいれ、原野や高山にたたずんで周囲を見廻した時、そこに見られる生物現象の多く

がまだ十分に説明できないものであることを考えてみる必要がある。実験室内での細胞レベル以下の基礎的研究は世界のどこでも行うことができるが、自然の複雑な条件下での生物には地域的な特殊性が加ってくる。欧米に比べ、日本でも長野県は複雑な環境と豊富な植物に恵まれており、これを研究に生かしたならば多くの興味深い問題を見出すことができ、他の追従を許さない独自の生物学的研究を発展させることができる。材料をとりよせて外国の研究の真似をしたり、後を追いかけるような仕事は避けるように心がけて欲しいものである。

生物学には生物の多様性、高等生物の複雑な構造、環境に対する適応、実験のできない系統や進化の問題、生物間の微妙な相互関係や調和など、他の学科とは異なり誠に興味が有り、しかもまだ未解決な部分の多い重要な基礎的問題が実に沢山ある。しかし近年中等学校の理科や高校の生物の教科書ではこれら重要な生物学の基礎的事項が軽く扱われ、逆に化学でも教えないような難解な化学的知識が生物で要求されたりするのは遺憾なことで、各方面から強い批判がでている。これでは生物に興味をもち将来生物学を専攻

したいという若い人々の意欲を、促進するよりは逆にそぐ結果になってしまふ。最近大学では植物学の基礎的分野の研究を希望する学生が増える傾向にあることを考え、その点を十分に配慮した生物教育が望まれる。特に教育県として長い歴史を誇る長野県で、生物学を教える立場にある方々が率先して、大局を見誤ることなく植物学全体が健全な発展をするように後進の指導にあたられることを切望する。

長野県植物の研究の歴史も古いので、近年は県の植物総目録や地方植物誌も幾つか出版された。私自身も軽井沢附近の高等植物を観察し初めて50年余になり、一応「軽井沢の植物」(1974)をまとめたが、まだ毎年訂正や追加を行うことが必要な状態である。欧米とちがい、長野県のような複雑で豊富なフロラを近代的手段で研究しつくすにはまだまだ長い年月がかかるであろう。長野県植物研究会の会員の方々は勿論、関心のある多くの研究者が広く力を合わせて、長野県フロラの解明に一層の努力をされると共に、更にこれを資料とした独自の植物学的研究が、日本は勿論世界的に発展してゆくことを心から願っている。

(東京大学名誉教授)

## しかくだけ (しほうちく)

大 井 次 三 郎

### J. Ohwi: A note on *Tetragonocalamus quadrangularis*

昨年スミソニアンウォーカー博士から氏の新著「沖縄植物誌」を頂いた。琉球列島の植物は初島住彦博士の琉球植物誌があって、同地方の自生植物は余す所がないが、ウ氏の著作は西洋の分類学者の眼で見たもので、近隣の地域の植物ともよく比較しているのが目立ち、私たちに大変有益であり、また同地で植えられている栽培植物の命名にも教ええられることが多い。

もうかれこれ十年程になるかも知れない。以前私がまだ科学博物館に勤めていたころのこと、一度ウ氏が訪れてこられ、博士のこの植物誌のうちの竹笹類の部分を私に分担するようにすすめられたことがあった。イネ科とはいっても私のほとんど調べたことのない難解な類でもあり、またスミソニアンには竹笹の専門家のマックリュア博士もおられたことでもあって、びっくりしてお断りしたが、英語の不得手の私はとうとう引受けることになってしまった。ウ氏の採集品を拝借すると同時に、那覇在住の外間現誠氏の援助をあおぎ、泥縄式ではあったが標本によって出来るかぎり調

べるとともに、現地の方々にもお願いして、可能なかぎりの知識をあつめて、沖縄島とそれ以西の竹笹をまとめ上げたのだが、何分にも付焼刃的な知識しかもないので、不充分の点が多く、反って短いけれども同所に記されたマ博士のノートの方が重要であることが多い。

日本産の初期のタイプ標本の多くは、西洋各地の大きな標本館におさめられていて、簡単には研究し難く、本式に日本で標本を蓄積しはじめたのも明治の初年からで、その後日本各地に多数の採集研究家もでて、年々資料も集まってはいるが、ともに高だか百年に達せず、比較材料としての外国の資料も貧弱で、しかも全国の数ヶ所に分散して所蔵されているにすぎない。分類学の発祥地として欧洲からはもちろん、アメリカなどの大きくてやや隔離された地域にくらべても、日本はなお格段に新しい。これら地方からの後発のハンデを負っているほかにアジアの縁辺にあって、比較すべき近隣地方の材料もまだ満足にあつまず、腊葉標本による研究から一歩進めるのはまだ容易なことではな